

城を歩く会 7月定例会「夏季研修会」 「城を歩く会」が訪ねた 「大河ドラマ・真田丸」の世界

平成28-7-26

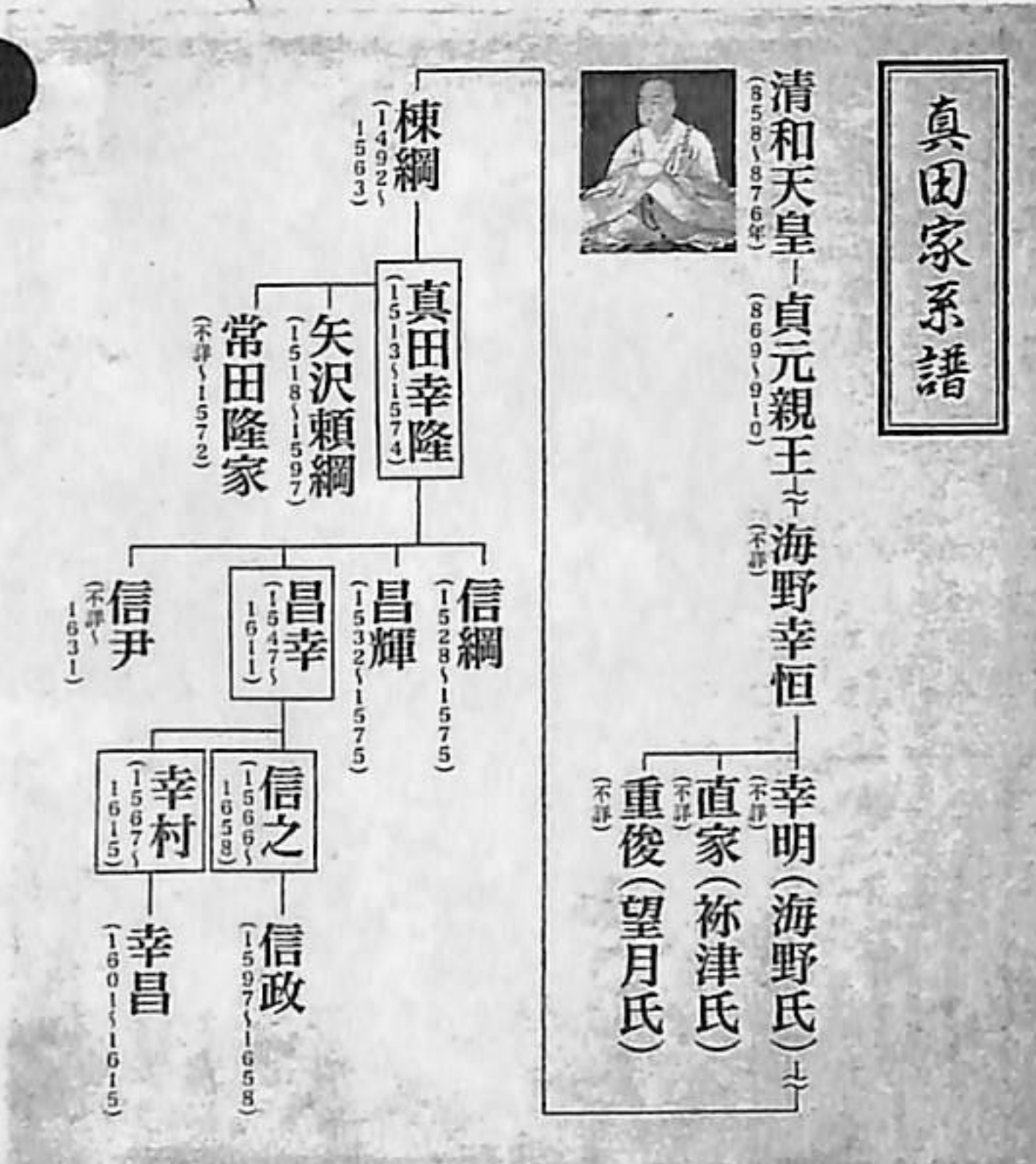
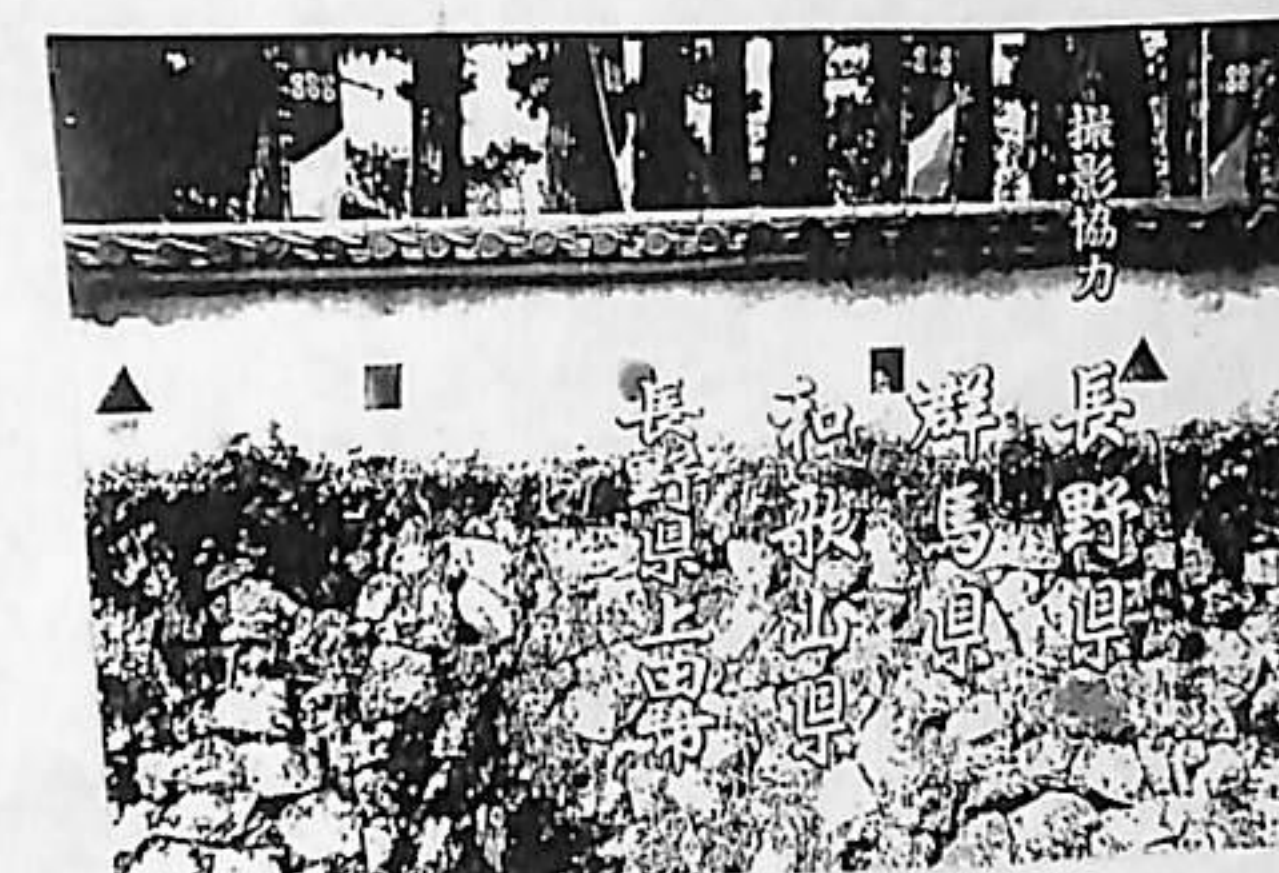
山岸弘明

当面のスケジュール 詳細は「会報」を参照ください

- 9月27日(火曜) 貨幣博物館、東京証券取引所、日本銀行本館見学会
- 10月12日(水曜) 奥沢城と等々力溪谷を歩く
- 11月9日(水曜) バス見学会「大河ドラマ真田丸」の岩櫃城、名胡桃城、沼田城を訪ねる



大河ドラマ



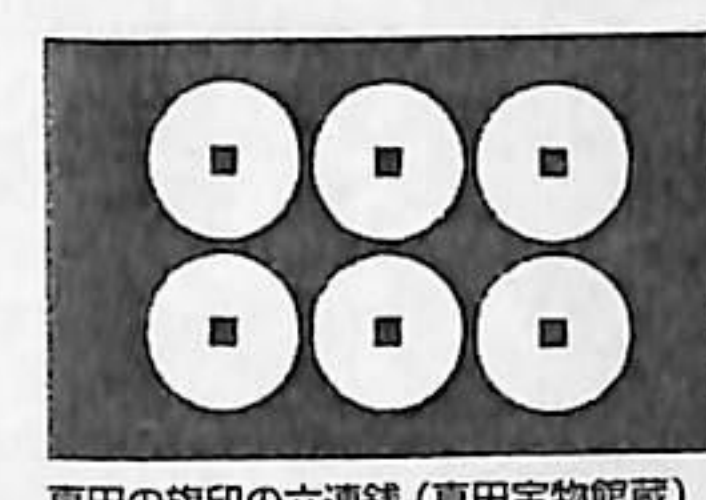
真田昌幸



真田信之



真田信繁



真田の旗印の六連銭(真田宝物館蔵)

幸村は夏の陣で戦死した。49歳だった。前歯は2本が抜け、髭(ひげ)もほとんど白くなっていたという。九度山の暮らしは、兄の信之などから援助があったものの非常に苦しく、あちこちに借金がかさんでもいた。豊臣家からの支度金、金200枚、銀30貫(現在の金額でおよそ16億円)は、病気がちの貧乏浪人幸村には目くらむほどの大金だった。この金で利息をつけて借金を返し、兵を募ったのだ。写真は真田幸村画像(個人蔵)。



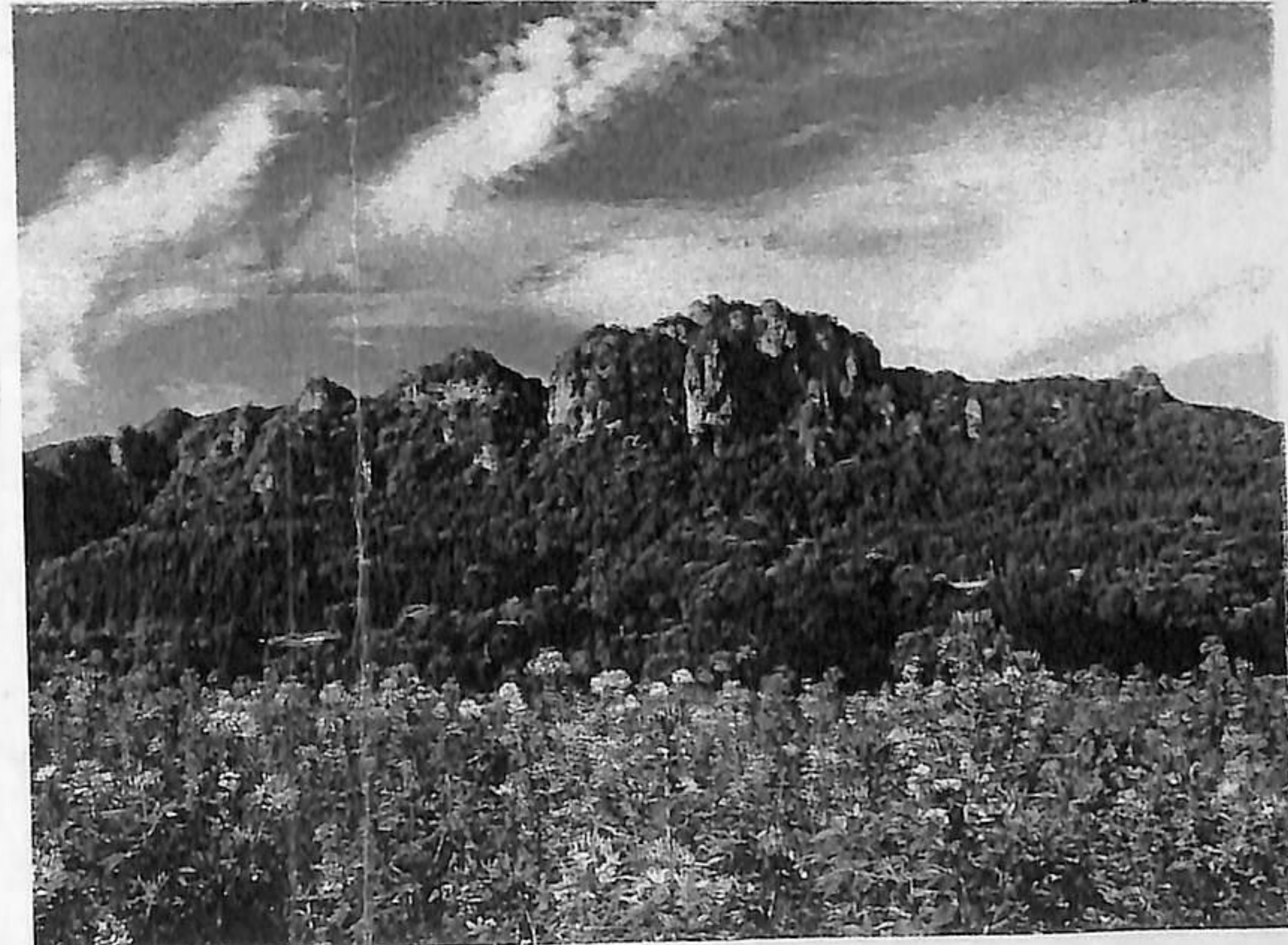
真田幸村銅像(長野県上田市)。「幸村」の名はいつのまにか一人歩きし、そのまま定着していったようだ。

「真田幸村」というのは真田幸村が必ずといっていいほど連想されるように、この名は広く世間に知れ渡っている。が、当の幸村本人が、「幸村」を名乗っていた形跡がないのはきわめて不可解なことだ。「源次郎」「信繁」という彼の自署は現存するものの、「幸村」と呼ばれていた確たる証拠はどこにもない。そこで、近年は「幸村」の名前は後世につくられたという説が有力になっていく。現存の文献上で「幸村」の最も古い登場例は、1672年(寛文12年)成立の「難波殿記」。この作者が、幸村の父や兄に共通する「幸」と、幸村の姉の「村松」の「村」を組み合わせて「幸村」を創作したのかもしれない。しかし、そもそもなぜ名前を創作する必要があったのかは不明である。謎だらけの名前なのだが、イメージに合うせいか、「信繁」は「幸村」になってしまったものと思われる。

「真田幸村」は本名にあらず!?

真田の山里に始まり、武田信玄の「国衆」として活躍

- 1) 本領は小県(ちいさがた)郡
 - ①真田氏=清和源氏滋野姓海野流。信濃国(長野県)小県郡真田郷を本拠とした小豪族に始まる
 - ②海野棟綱の子幸隆が真田郷に住み真田を名乗った(はっきりしない出自、系図は不明な点が多い) 信繁の祖父幸隆は武田信虎に攻められいったん故郷を追われるが、のち信玄に属して念願の本領復帰を果たす。以後武田家「国衆」としてその勢力を小県郡一帯に広げた。
- *国衆=自治権を持ちながら強力な戦国大名に従属すること。国衆は直轄領以外に、近隣の小領主を従えて一地方を統一した
- ◎真田本城跡(長野県)=真田氏発祥の地で松尾古城ともいう。幸隆が築き昌幸が上田城に移るまで居城した。平山城。本丸郭、2の郭、3の郭、居館跡、土塁、空堀など。本丸跡から真田地区一帯、周辺支城、上田方面が一望できる。真田氏歴史館を整備、関係文書や武具などを展示している。本会の往訪は1回だけ、平成13年10月「信濃路の古城を一泊バス旅行」で大森初代会長にご案内いただいた。

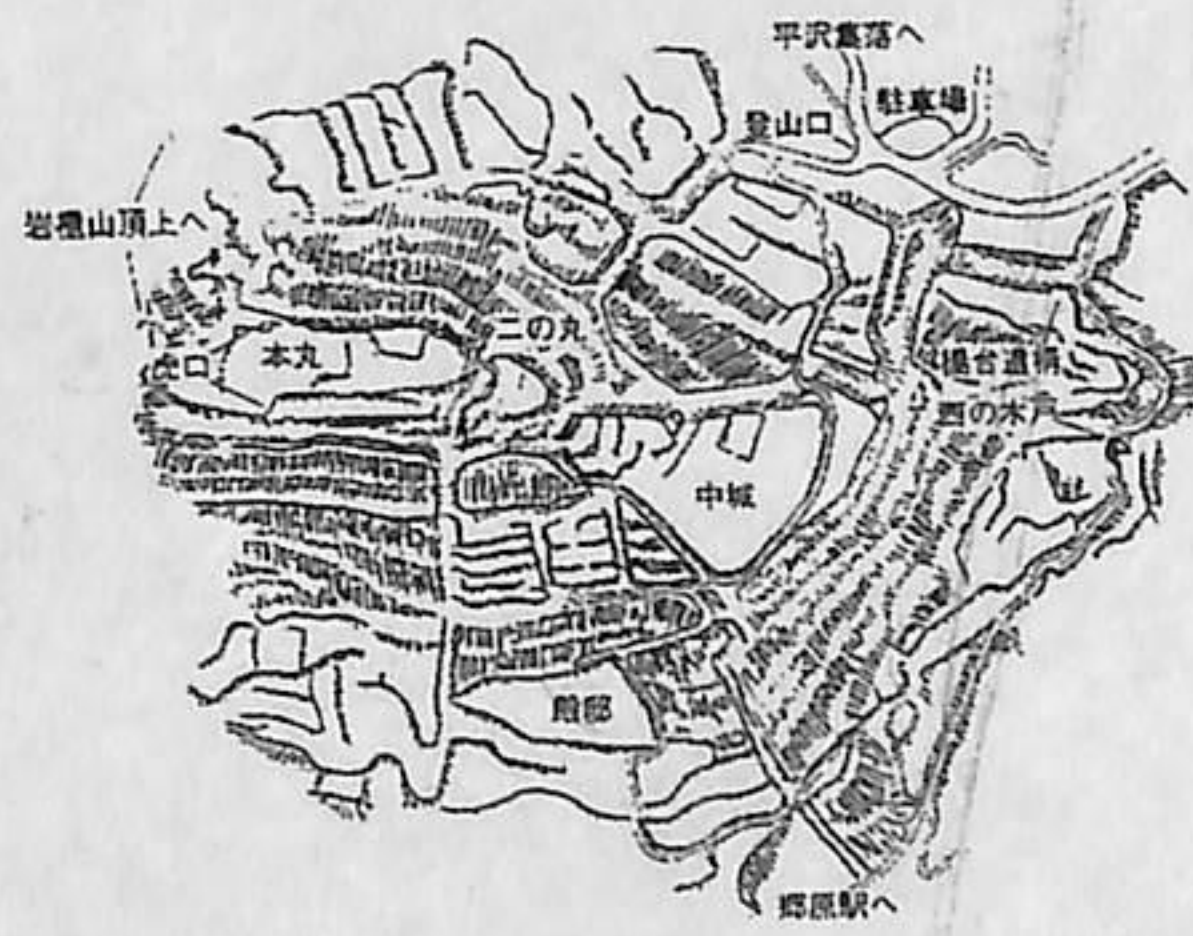


岩櫃山

標高802.6メートルの岩山で、吾妻八景を代表する景勝地として知られています。南面は約200メートルの絶壁で、奇岩、怪石からなる切り立った山容は、中国の南画のような趣があり、「くろま百名山」にも選ばれています。山頂からの眺望はすばらしく、眼下には東吾妻町や中之条町の市街地、眼前には上州の山々が広がり、晴れた日には遠く富士山も望めます。

岩櫃城跡(町史跡)

岩櫃城は、築城時期や築城者は不明ながら、中世に築かれたとされる山城で、文献に初めて登場する城主は、南北朝時代(1336~1392)の吾妻太郎行盛です。戦国時代の永禄6年(1563)、斉藤越前守憲広(基国)の本城であった岩櫃城は、武田信玄の家臣・真田幸隆によって落城されました。以後、東吾妻は武田氏、そして真田氏の支配地となり、岩櫃城は、上田城と沼田城を結ぶ真田道の中間地点として、重要な位置を占めてきました。徳川幕府の開設後も、岩櫃城は真田氏の城として使われましたが、慶長20年(1615)に徳川家康が発令した「一國一城令」によって岩櫃城は破却され、その役割を終えました。



要害地区略図
岩櫃城は、岩櫃山の中腹東面に築かれており、城の東端は番匠坂、西端は本丸から400mほどの場所とされています。本丸や中城などを擁する要害地区は、南面の切沢の谷と山裾の斜面を自然の城壁としています。



岩櫃城本丸跡
25m×15mの建物の土台と思われる形跡があり、ここに岩櫃城の展望台と指揮台を兼ねた中枢部があったと考えられています。

上州吾妻郡岩櫃古城之図 ※長野県立歴史館蔵

2) 「離散糾合」は戦国のならい〜知略と武勇で徳川軍を撃退した「上田合戦」

- ①昌幸は天文16年(1547)真田郷に誕生、7才の時人質として甲府に送られる。武田信玄に認められ、名家武藤家を継いで信玄一族に連なり重臣として活躍することになる。
- ◎躑躅が崎館(山梨県) = 武田信虎、信玄、勝頼、武田3代の城館。要害平山を中心に四方に堀と土塁をめぐらせた。主郭は現在の武田神社。部分石垣の土の城で、丸馬出しが特徴。本会の往訪は平成9年等3回。
- ②天正元年(1573)武田信玄没、同3年勝頼は織田・徳川連合軍との「長篠の戦い」に大敗。同10年織田軍に追われて自害し、武田氏は滅亡した。
- ◎新府城(山梨県) = 長篠の戦いに敗れた勝頼が鉄砲戦に耐えうる城として昌幸に縄張り、築城総責任者を命じた。石垣のない平山城で、この地で青年期を過ごした信繁がのち大坂城の「真田丸」で倣った。平成9年、19年の2回訪ねた。
- ③主家が消滅し実兄も戦死、真田家の統領に繰り上がった昌幸はいやおうなく自立した戦国大名としての道を歩む。当時上信州周辺には上杉、北条、徳川らの強豪がひしめき争奪戦になろうとしていた。自領を守り、没落を防ぐには優位な勢力に従属しなければならない。昌幸は進撃してきた北条氏直にくんだり、まもなく徳川家康に鞍替える。
- ④天正10年昌幸は織田信長にも臣従するが、京都本能寺で明智光秀に襲われて自害して実らない。
- ⑤同年再び北条氏直、3か月後に家康、といった具合だった。
- ⑥「真田の城」として名高い上田城はこうした駆け引きの中で、家康の対上杉最前線基地として築かれたが実質的城主は昌幸であった。この年北条、徳川の和議が成立、自領の沼田地区が奪われそうになると、次男信繁を人質に差し出して上杉家にすがった。この時「第1次上田戦争」、昌幸は奇策を弄して徳川軍を敗走させた。「離反糾合」、昨日の敵と組むこともめずらしくない。激流の時代、綱渡りどもあった昌幸の「変わり技」と知略がさえた。
- ◎上田城(長野県) = 天正11年昌幸が千曲川分流の尼ヶ淵河岸段丘上に立てた平城。2度にわたった上田戦争で徳川軍を苦しめた。関ヶ原後破却され、のち仙石忠政が復興した。大手門、南北櫓等を復元、みごたえがある。本会は3回。「六連銭」が町中にあふれる真田城下は現在も健在。
- ⑦天下は豊臣秀吉のもとに固まりつつあった。昌幸は後ろ盾をより強くするため今度は秀吉に接近、上杉家へ人質になっていた信繁を引き上げて秀吉の元へ送り替えた。コケにされた景勝は怒ったが秀吉相手に喧嘩もできず泣き寝入りに終わった。

秀吉「小田原征伐」で天下人となる

1) 信之と信繁〜人質先がわけた兄弟2つの道

- ①真田信幸(信之) = 永禄9年(1566)昌幸長男として甲府で誕生。源三郎、信幸、信之。父を助けて真田家を盛り立てていく。父が秀吉に臣従した時、秀吉の命で家康の寄り子として出仕させられる。天正18年(1590)四天王のひとり本多忠勝の娘・小松殿と結婚、この縁から関が原の合戦の時、下野伏伏で父、弟と決別、徳川方に加わった。
- ◎府中城(静岡県) = 天正13年と慶長12年家康築城。一部を復元整備、2の丸堀、3の丸堀、大手櫓門など見どころが多い。信幸はここで寄り子(人質)生活を送った。平成16年等3回
- ②真田信繁 = 永禄10年昌幸2男に誕生。弁丸、源次郎、信繁。有名な「幸村」は後世の作文で根拠はない。母は山手殿。出生から青年期の記録もなくほぼ不明。19才の時上杉人質として海津城、春日山城に送られ、ついで今秀吉の人質とされた。同18年石田三成と盟友の大谷吉継の娘を妻とした。関が原の戦いは父とともに西軍、徳川軍の通行を足どめしたが、兄信之の取り成しで死一等を免れ父とともに高野山、九度山に追放された。
- ◎海津城(長野県) = のちの松代城。武田氏の対上杉境目の城(最前線城)として祖父幸綱が築城に係った。信幸はこの地で上杉氏の人質にされ、のち上田から転封して松代藩を成立させた。(後出)
- ◎春日山城(新潟県) = 上杉氏の本拠、謙信が本格的に整備強化した。人質の信幸が移された。石垣のない土の城で、戦国時代有数の難攻不落の山城とされる。14年と24年の2回。
- ◎大坂城(大阪府) = 豊臣秀吉が天下取りの拠点として天正11年に築城を開始、5重8階、黒漆塗り天守に金の金具をつけた豪壮天守を上げた。大坂夏の陣で焼失、豊臣家も滅亡した。(後出)

2) 「北上州抗争」で北条氏滅亡〜岩櫃、沼田、名胡桃城の攻防

- ①北上州は信濃、越後、日光に通ずる要衝地で上杉、武田、北条氏勢力の争奪戦地であった。天正8年昌幸は信玄を継いだ勝頼の命で北条氏が抑えていた沼田地区に攻め入り、沼田城を無血開城させて叔父の矢沢頼常に統治させた。同10年勝頼自害の時、甲斐の新府城にあった信繁は母山手殿をともなって岩櫃城に脱出した。
- ◎岩櫃城(群馬県) = 鎌倉時代ともいわれるが築城年、城主は不明、永禄6年(1563)幸隆が斎藤氏を攻略、以降武田氏の北条支配拠点として真田氏が居城した。天険の岩櫃山中腹北東尾根に立地、岩櫃山の岩山急ガケ、吾妻川への急斜面に囲まれた天然の要害で、尾根を本丸、2の丸、中城の順に堅堀りが仕切る。信幸が沼田城を領有するとその支城となり、元和元年の「一国一城令」で廃城となった。吾妻街道から眺める岩櫃山は峻嶒な奇岩がそそり立ち、今回の大河ドラマ「真田丸」の導入タイトルシーンにも使われた。ことし11月のバス旅行をお楽しみに。



真田本城跡

真田氏發祥の郷



上田城

真田昌幸は旧武田の有力家臣。主家の滅亡後は、北条、徳川、上杉という大勢力の中で、あつちについていたりこつちについていたりを繰り返して自領を保っていた。そんな中、1585年(天正13年)に真田家は領土関係のもつれから、徳川と交戦状態に入る。独力では大敗必至だ。そのため昌幸は越後(現・新潟県)の上杉景勝に2男の幸村を人質に出し、救援を要請。結果、自身の見事な用兵と上杉の援軍をもって、徳川軍に快勝する。しかしこの第1次上田合戦の翌年、昌幸は大恩ある景勝から、より頼れる秀吉



昌幸にしてやられた上杉景勝。養父の謙信と同じく、義を重んじる実直な武将であった。(上杉神社蔵)

へと乗り換え、越後から脱出させた幸村を秀吉に差し出した。当然景勝は立腹するが、相手は天下統一を目前にする秀吉。容易に手出しはできない。すべてを計算した昌幸の、したたかな行動であった。

弱小大名・真田昌幸の戦国サバイバル必勝法



秀吉は、人質として送り込まれた大名の子息たちでも、気に入れば登用のチャンスを与えた。幸村もその1人で、秀吉の近臣として信頼の厚い大谷吉継の娘と結婚し、なんと豊臣の姓まで許されたという厚遇ぶりだった。幸村が秀吉に目をかけられた理由は、温和で明るい性格にあっただけではない。兄の信幸は、幸村を「いつも柔和で強情を張らず、些細なことでも怒ることがない」と評している。またある記録には、「人と交わる時は面白いことをよく言い、場を和ませた」ともある。老練でクセの強い父・昌幸と違って、幸村は誰からも好かれる好青年だったようだ。



岩櫃城

◎沼田城（群馬県）＝天文元年沼田氏築城。利根川と薄根川合流点河岸段丘上、北関東の要衝、軍事拠点として上杉、北条、武田氏の争奪戦の的となった。武田氏時代の昌幸が北条から奪い、秀吉の裁許でいったんは北条氏に属したが城代が名胡桃城を襲って「小田原征伐」の口実となった。沼田城は真田家に返され信幸が城主となり5重天守を建造するなど整備するが支藩時代の天和3年御家騒動で廃藩、元禄年間本多氏が入城して復活した。これまで2回、11月のバス旅行で。

◎名胡桃城（群馬県）＝沼田城支城として昌幸が整備、秀吉の裁許には双方が不満だった。現況は曲輪跡や空堀、土塁、深い谷と対岸の沼田城を俯瞰する。11月のバスが初めて。

②天正12年権大納言、13年関白、14年太政大臣に進み、16年京都に建てた聚楽第に後陽成天皇の行幸を迎えた秀吉は「天下人」として、大名間の私戦を禁止した「惣無事令」を発令した。

③秀吉は沼田地区の北条、真田抗争の境界を利根川と確定、3分の2にあたる沼田城を北条領、3分の1の名胡桃城を真田領と定めた。天正17年秋、北条城代の猪俣軍は利根川を渡って名胡桃城を攻略した。激怒した秀吉は全国の諸大名に「小田原征伐」を命令する。

④天正17年北条氏政に「宣戦布告状」を突きつけた秀吉は20万もの軍勢を動員し、翌18年3月1日小田原を目指して出陣した。3月29日箱根防衛の要である山中城を落城させ、4月6日には早雲寺に本陣を置きおよそ15万の兵力をもって小田原城を取り囲んだ。

⑤石垣山一夜城もおおよそ90日で竣工、6月26日に秀吉も本陣を移した。城内に千利休や側室の淀君を呼ぶなど長期戦の構え、北条勢は戦意を失って降伏、氏政、氏照らの切腹で北条氏は滅亡した。

◎小田原古城（神奈川県）＝後北条氏綱、氏康、氏政、氏直4代の居城。八幡山の小田原高校周辺一帯に本丸等、石垣のない土の城で、江戸時代は山城部分を忌城として閉鎖、平城部分に近世小田原城を築いた。巨大空堀、大外郭等を平成8年外に訪ねた。

◎石垣山一夜城（神奈川県）＝天正18年秀吉が「小田原征伐」の陣城として構築、一夜のうちに木を切り払ったので一夜の内に城ができたようにみえたことが城名の由来となった。織豊期の総石垣造りで天守をもった本格的山城。これまで2回。

⑥信幸と信繁兄弟は豊臣方として出陣。戦後の「論功行賞」で寄り親の家康は関東に移封され、真田家は本領上田領を安堵、信之に沼田領が与えられた。ここに真田家は家康から独立、豊臣大名となった。

小田原城攻囲・主な武将と兵力

豊臣秀吉	(摂津・大坂城)	28,070
徳川家康	(駿河・駿府城)	30,000
織田信雄	(尾張・清洲城)	15,000
蒲生氏郷	(伊勢・松坂城)	4,000
羽柴秀勝	(美濃・大垣城)	2,500
羽柴秀次	(近江・八幡山城)	17,000
宇喜多秀家	(備前・岡山城)	8,000
織田信包	(伊勢・安濃津城)	3,000
細川忠興	(丹後・宮津城)	2,700
池田輝政	(美濃・岐阜城)	2,500
堀秀政	(越前・北庄城)	5,300
長谷川秀一	(越前・東郷城)	3,000
丹羽長重	(加賀・松任城)	700
浅野長政	(若狭・小浜城)	3,000
木村重茲	(越前・府中城)	2,300
九鬼嘉隆	(志摩・島羽城)	1,500
加藤嘉明	(伊予・加志城)	600
長宗我部元親	(土佐・岡豊城)	2,500
脇坂安治	(淡路・洲本城)	1,300
他		

支城攻囲・主な武将と兵力

上杉景勝	(越後・春日山城)	10,000
前田利家	(加賀・尾山城)	18,000
真田昌幸	(信濃・上田城)	3,000
松平康国	(信濃・小諸城)	4,000
蜂須賀家政	(阿波・徳島城)	2,500
生駒親政	(讃岐・引田城)	2,200
福島正則	(伊予・国府城)	1,800
戸田勝隆	(伊予・板島城)	1,700
石田三成	(近江・佐和山城)	1,500
他		

三浦木園「かながわの城」(神奈川県新聞社)より

小田原城籠城兵力
約56,000



沼田城



名胡桃城



小田原古城



石垣山一夜城

大坂落城と真田丸の活躍～秀吉の義に殉じた

1) 「真田丸」で徳川軍を翻弄～「大坂冬の陣」の活躍

①関が原の合戦は「天下分け目の戦い」ではあったが、あくまでも三成と家康の私戦、秀頼は依然大坂に健在で、豊臣恩顧の大名も多く家康にとって一刻も早い豊臣家の一掃が最大の課題であった。

②慶長8年、朝廷工作により征夷大将軍の位を獲得すると2年後には実子秀忠を次期将軍とした。

③宿願の豊臣家打倒に家康が考えた奇策は方広寺の鐘楼銘へのいいがかりであった。「国家安康」「君臣豊楽」のフレーズを「家康の名を分けて呪い、豊臣が君として楽しむ」と解釈して厳しく詰問し、秀頼の江戸参勤、生母淀の人質、大坂城からの転封の択一を迫った。豊臣方は反発、全国の豊臣恩顧の大小名に援軍を求めた。一方関ヶ原合戦の生き残りなど浪人10万人が集結、謹慎中の信繁は150の手勢を率いて九度山を脱出、大坂城へ駆けつけた。

④家康は勝手に軍備を進めたことを咎め、慶長19年10月兵20万の大軍で大坂城を包囲、「大坂冬の陣」が始まる。豊臣方の作戦は「総構え」を頼んだ「徹底籠城」であった。

⑤大坂城は淀川など3方を川に囲まれ、陸続きの南面に大空堀を配している。総面積は2km四方。最大の弱点平野口を担当する信繁は大空堀の前面に東西220m、南北280m、外周に空堀と3重の柵を構えた「真田丸」を構築した。

◎大坂城真田丸（大阪府）＝地下鉄・玉造駅近い明星学園を中心に、心眼寺、真田山公園一帯。明星学園は大規模な地面削平されている。心眼寺は信繁と大助菩提のため建立、「真田幸村（信繁）出丸跡碑」や「真田の抜け穴跡」等がある。発想は武田流「丸馬出し」。父昌幸の新府城縄張りを応用したもので、自然地形を最大限に活用した。

⑦信繁の作戦は攻め手を挑発して防御構造に誘い込み、徹底的にたたかというもの。攻め手の前田、井伊、松平軍が3の丸に取りついた所を横矢が狙い撃ちした。「外堀は死体で埋まり平地と変わらなくなった」という。

⑧秀吉の建てた大坂城は難攻不落で容易に落ちない、戦闘は長引く気配をみせた。この間家康は連日連夜大坂城に鉄砲を打ちこんで、実質城主の淀君を脅し、頃合いをみて和睦を持ちかけた。12月9日講和成立。しかしその「和睦」にも罠があった。

⑨和睦条件は総構え堀を徳川、2の丸と3の丸堀を豊臣方で壊すことであった。ところが総構え堀を埋め立てた徳川方は一気に2の丸と3の丸も埋めた。本丸ばかりの裸城となる。家康がこの機を逃すはずはない。今度こそ息の根をとめるべく牙をむいて襲いかかった。



大坂冬の陣
豊臣家滅亡へのプロローグ

1614年(慶長19年)

5月	徳川幕府、方広寺の鐘銘にいいがかりをつける。
8月17日	片桐且元、駿府城へ出向くが承諾できないような条件を示される。
10月1日	片桐且元、恭順説をとるが、裏切り者とされ大坂城を退城。
10月10日	真田幸村、大坂城に入城。
10月11日	徳川家康、駿府城を出発。
10月23日	徳川家康、二条城に入城。徳川方の本隊、江戸を出発。
11月10日	徳川方の本隊、伏見に到着。
11月17日	徳川秀忠、大坂の平野(ひらの)に陣を進める。
11月18日	大坂城包囲網完成。
11月19日	両軍の小競り合いはじまる。
11月26日	大坂城の東北、大和川をはさんで建っている今福、鳴野(しぎの)の2つの砦が徳川方に攻撃され、占領される。
11月29日	木津川河口の博労ヶ淵の砦が徳川方に奪われる。
12月4日	真田丸の攻防戦。徳川方の惨敗。
12月17日	塙団右衛門、徳川方の陣地に夜襲。
12月18日	大坂城外で最初の和平交渉。
12月19日	講和条件が決まる。
12月20日	徳川方の砲撃停止。
12月21日	双方の和議の誓書交換。
12月25日	家康、二条城に帰還

大坂夏の陣
豊臣家滅亡のエピローグ

1614年(慶長19年)

12月21日	冬の陣和議の誓書交換。
12月23日	大坂城の堀の埋め立てはじまる。
1615年(元和元年)	
1月24日	大坂城二の丸・三の丸の破却工事が終わり、諸大名の軍勢が撤退をはじめる。
2月14日	家康、駿府に帰着。
3月24日	家康、秀頼が大和へ移るか新たに徴募した浪人を解雇するかの二者択一を迫る。
4月18日	家康、京に着いて二条城に入る。
4月24日	家康、秀頼に大和への国替えの最後通牒を發す。
4月26日	大坂方の大野治房、大和郡山城を占拠。
4月28日	大坂方、家康に荷担する砦を焼き討ち。
4月29日	榎井の戦い、塙団右衛門戦死。
5月5日	家康出陣、河内の星田に本陣を置く(大坂城へ12キロメートルの距離)。
5月6日	真田幸村・後藤又兵衛ら、徳川方と道明寺の合戦。後藤又兵衛、薄田準人正、木村重成討ち死に。
5月7日	幸村総攻撃、家康の本陣をおびやかすが、奮戦むなしく戦死。大坂方敗色濃くなり退却。千姫、大坂城を脱出。三の丸に火の手上がり、淀殿・秀頼、山里曲輪へ。
5月8日	淀殿・秀頼自刃。家康、二条城に凱旋。
5月16日	家康、参内して大坂のことを報告。

2) 家康を迫いつめた信繁の死に場所～「冬の陣」で豊臣氏滅亡

- ① 4月、徳川の軍が大坂城に迫ったが、もはやよく総構え堀はない。豊臣方はやむなく野戦に打って出る。信繁の目標は家康ただ一人、天王寺に陣取った家康本陣を急襲、旗本隊は混乱、家康は逃げ惑って切腹も覚悟したとされる。しかし信繁の武運もここまで、安居天神近くの田あぜで打ち取られた。
- ② その日の内に本丸が落ち、夜には天守も燃え上がった。秀頼、淀君ら主従30人が唐物蔵で自害したのは翌5月8日午後2時ころであった。その中に信繁が「秀頼、淀君身辺警護」のため大坂城に戻した1子大助の姿もあった。
- ◎ 大坂城(再) = 現存する大阪城跡公園には豊臣時代の遺構は徳川氏によって土中深く埋められ、一握りの土砂も一個の石かけらの現存していない。しっかりと土中遺跡として保存されたとはいえる。本会では平成26年「20周年記念企画」で、「秀頼、淀君自害の地」などを訪ねた。

3) 戦国時代を生き抜いた信之が松代真田家10万石の礎を築く

- ① 信之は関ヶ原の合戦の論功行賞により本領沼田2万7千石を安堵、父昌幸の遺領と小泉郡が増加されて9万5千石の大名となった。上田城は家康にさんざん煮え湯を飲まされた遺恨をもって破城されたので、信之は沼田城に在城した。
- ② 元和3年松代13万石に転封、長男信吉と2男信政の一部を分知して自ら10万石を領した。
- ③ 万治元年93才の天寿をまっとうした。霊屋は国の重文で松代の長国寺。信之の興した松代藩は明治維新まで続いた。
- ◎ 松代城(長野県) = 千曲川の自然堤防上の平城。武田信玄の海津城を信之が近世城郭に改造。本丸大手門等を復元、13年、16年など。藩校、真田邸、信之の墓なども回った。

4) 信繁の人気は「死の美学」につきる～まとめ

- ① 信繁(幸村)は戦国武将の中でも屈指の人気ものだ。日本人は滅びゆく「敗者」が好きだ。そのはかなさ美しさに共感し涙する。強大な権力に立ち向かい、全力を尽くして戦い、敗れ、そしていさぎよく散っていく。信繁=真田幸村の人気の秘密は、「大坂冬、夏の陣」を通じた「死の美学」にあった。

以上



← 九度山 → 20周年の大坂城



昌幸の墓

真田丸跡

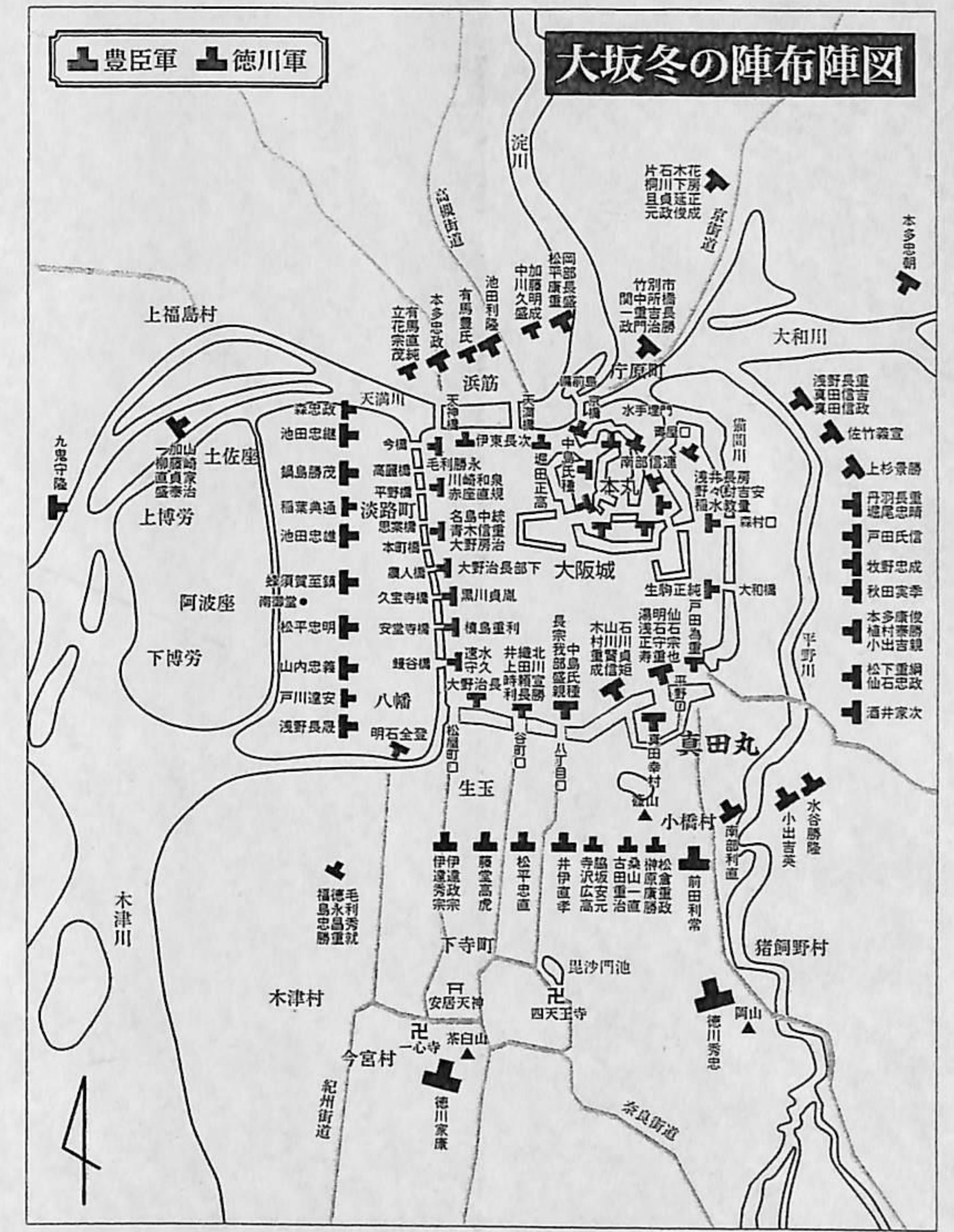
松代城



現在の心観寺坂の頂上付近が、真田丸のあった場所と考えられる。坂の途中にある心観寺も、真田幸村・大助父子の菩提を弔うために建立されたといわれ、真田山とも呼ばれた。



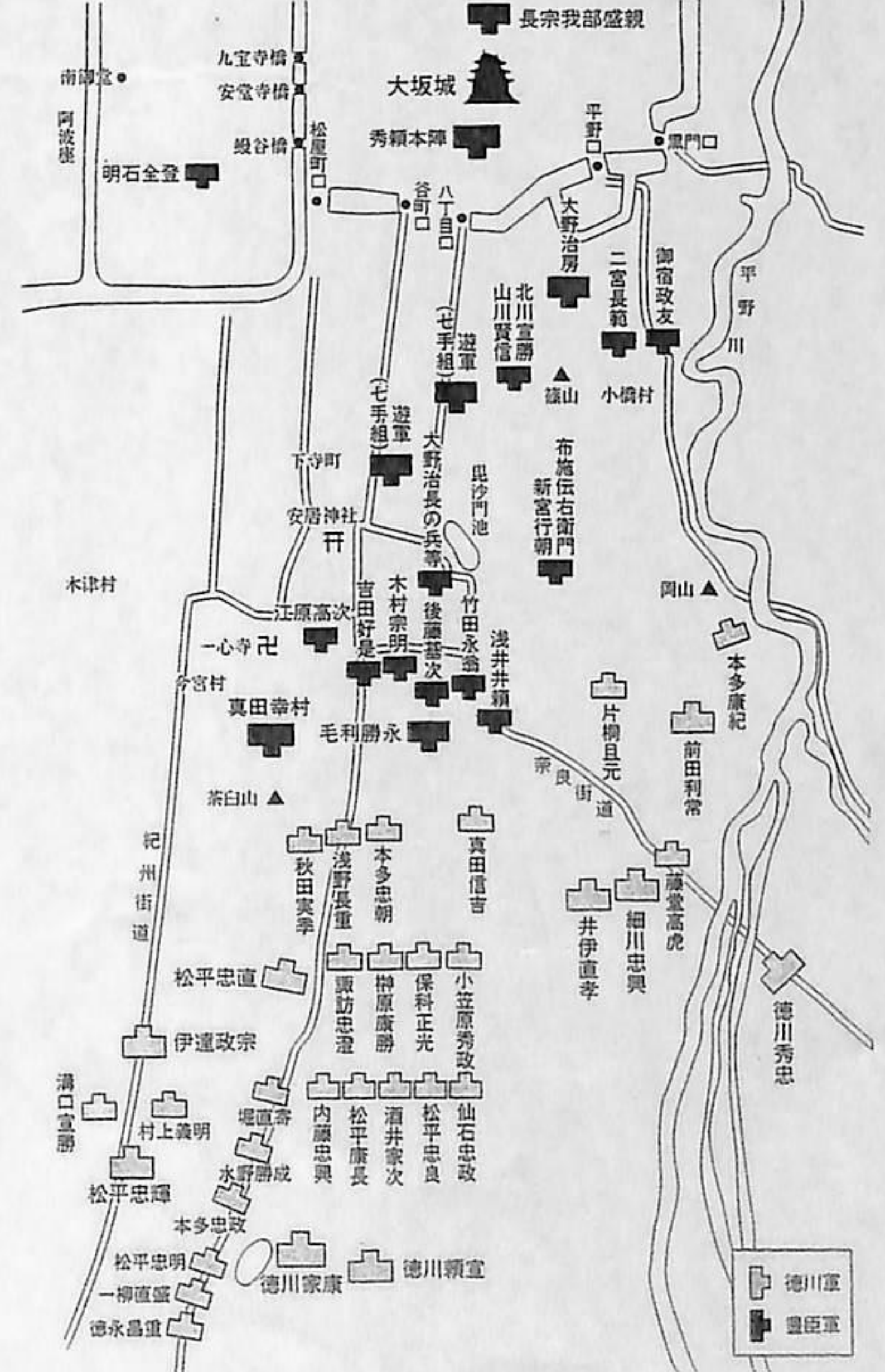
真田幸村は真田丸に立てこもって、押し寄せる徳川軍を相手に奮戦した。(「大坂冬の陣図解」東京国立博物館蔵)



大坂冬の陣・合戦図

徳川20万の軍勢も攻めあぐねた難攻不落の城。広大な敷地面積を持つ大坂城を完全包囲した徳川軍。唯一の弱点ともいえる南側に真田幸村が出丸「真田丸」を築く。

大坂夏の陣 天王寺合戦布陣図・慶長20年(1615年)5月



秀吉が建てた大坂城は、かつての石山本願寺の跡地を再利用しつつ、さらに規模を拡大。5層6階の天守は地下2階まであり、二の丸外堀は幅20メートル、深さ30メートルに。城内には諸大名の屋敷も完備。総面積は2キロ四方(現在の大阪城公園の約4倍)にもわたった。また、北は淀川、西は東横堀、東は大和川・平野川によって守られていたが、南側には城の周囲に築いた囲いである惣構の堀のほかは平地が広がっていた。真田幸村は、唯一の弱点と呼べるこの南側の平野口に真田丸を築いた。

この難攻不落の巨大城を攻略するために家康が動員したのは、諸大名を含めて約20万。秀頼方に集結した兵は約10万だが、鉄壁の守りで、徳川軍は最後まで堀の中に侵入することができなかった。

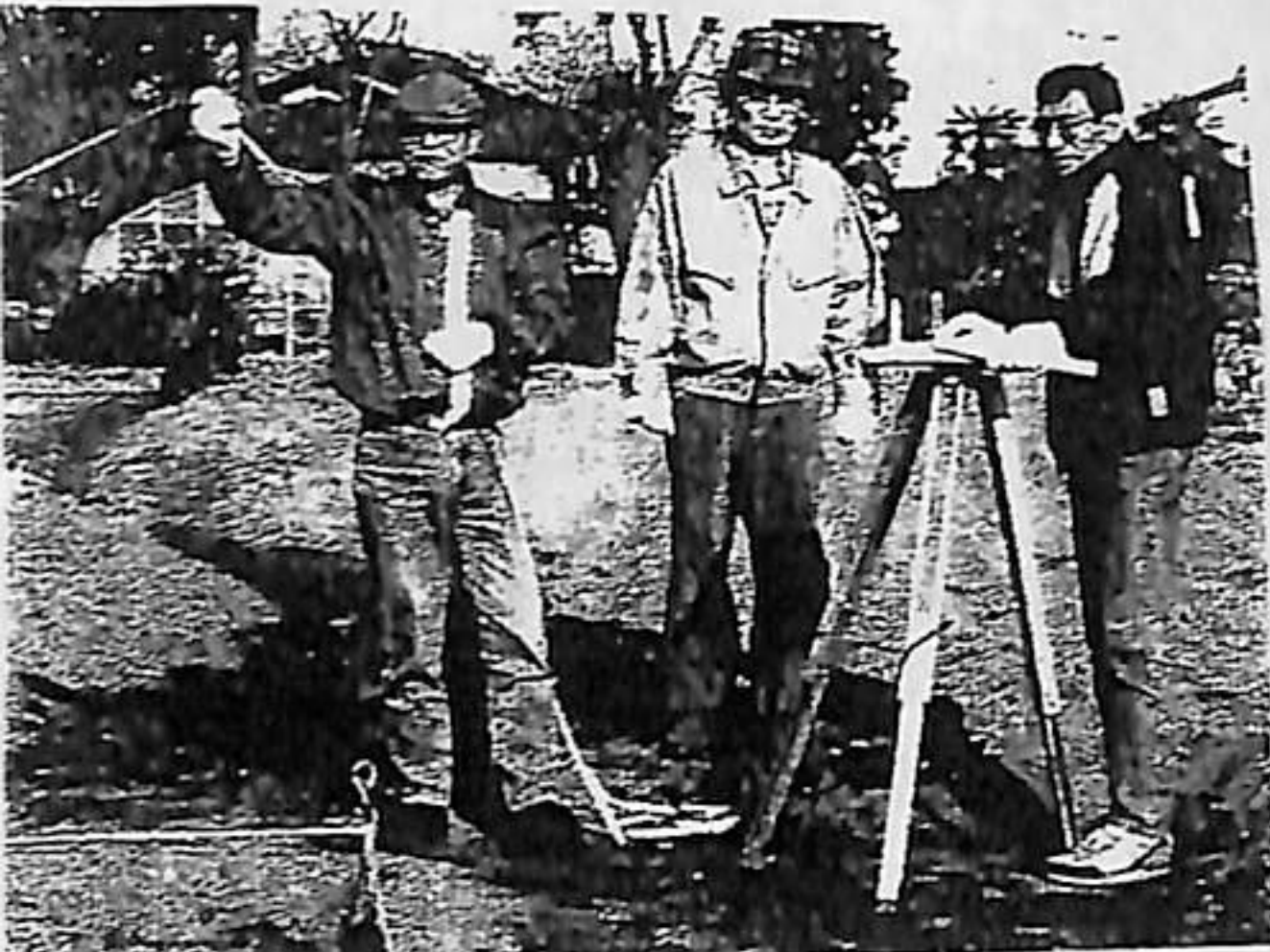
大坂城は、東・西・北の3方を川で囲まれており、南側だけが平地に面している。敵の主力はこの南側へ攻め寄せてくるにちがいない。大坂城に入った名將真田幸村は、この南側を補強するために、城から突き出すような形で出丸の真田丸を築いた。攻め寄せた敵が城壁に取り付いても、真横から狙い撃ちできる位置だ。この真田丸に、幸村は自分の手勢1500人と浪人5000人を率いて立てこもった。

徳川方は、予想どおり城の南側に主力を展開した。しかし、戦いがはじまっても、大坂方は籠城戦の構え、徳川方も持久戦の構えをとっている。小競り合いが続くうち、城内で失火があった。これを内応者の合図と勘違いした徳川方が総攻撃をしかけてきた。軍勢は城壁に取り付くが、真田丸からいっせいに狙い撃ちされ、たちまち戦死者の山ができる。大坂城の堀は死体で埋まり、平地と変わらなくなったと記録に残っているほどだ。

冬の陣における徳川方の戦死者のほとんどはこのときのものだという。思いがけない大敗北に、家康も講和を考えるようになった。この講和の条件として真田丸はまっさきにこわされてしまった。

謹んで大森拓二名誉会長のご冥福をお祈り申し上げます

大森さんの思い出アルバム



現役の西ヶ谷先生と



10周年記念講演



大坂修会びの講座



丸餅城び



お元気な大森さん

2011年2月16日
「城を歩く会」会報 第48号

【はじめに】
1月22日、虎ノ門「レストラン立山」で開催した新年のついでにはこれまで最多の56名の会員が参加して「城を歩く会」ますますの発展と発展を祈念しました。席上、大森拓二会長から「健康上の理由により第一線を退きたい」との表明があり、名誉会長に就任されました。会員一同、会長の17年間にわたる熱意に満ちたご指導に感謝申し上げます。また、今後の変わらぬご指導をお願いいたします。本号は、大森前会長に追悼のご挨拶をさせていただきます。また、2頁には会長代行に就かれた山岸弘明さんから会員の皆さまへのお断りを掲載しました。

「さようなら」とは言いません
名誉会長 大森拓二
対人の心臓も弱いうえに、体内の本音の心臓も不健康。おまけに脳こうそくで言語障害。さらに老人性痴呆症とやらの手足の痛み。最近の10年間に7回も半月ずつ入院を繰り返して女房に苦労をかけてきました。事実、「城を歩く」と断ったものの、昨年9月の「お台場」以来、私は二宮内のお役に立たなくなっていました。続く10月の宿泊の福井方面では、コースの半分も歩けずベンチで待っている状態でした。その帰路の車中から考えました。「身を引くのは当然だ、残念だけれども」と。
その11月の運営・実行委員会委員会の冒頭に私は会長の辞任を申し出ました。しかし結論は明確でなく、新年の会で皆の意見を聞いてからとなりました。新年の会の閉会の挨拶で私は「新年おめでとう」は一斉に唱え、「今年もよろしく」とは私は言えない。断固の意で会長を辞任すると申しました。断固に辞めて、「やめないで」「出られる条件の会には出て」と50名を超える出席者の会員から温かい言葉をいただきました。私にとってこれまでの生涯にない「身に余るお言葉」です。いかに体が動かなくとも、この声に背くことは絶対にできないことです。
山城の坂道でなくとも、たとえ都内の史跡でも、おそくご一緒に歩くことはできないでしょう。夏の行事の「金満堂の会」だけしかご協力できる会はないと思います。それは平成8年の本会の結成以来、私が思い続けたこと。「断は現時へ足を運んでこそ受け止められる」に反します。しかし、まさに「断固の意」で実行しようと思えます。会長でなく、一人の城の研究者として。

「引退おめでとう」の会報



平成24年の高田城び



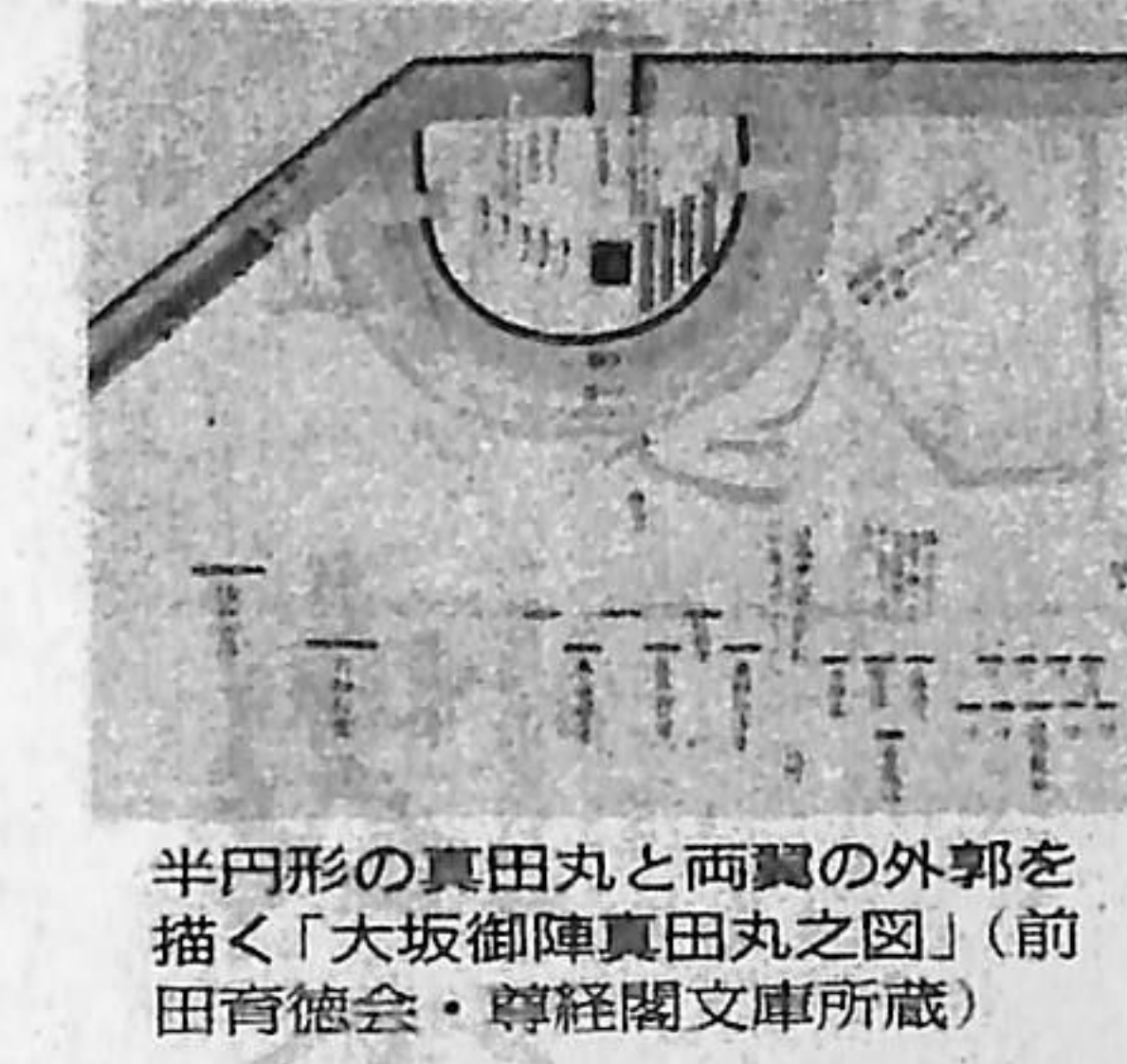
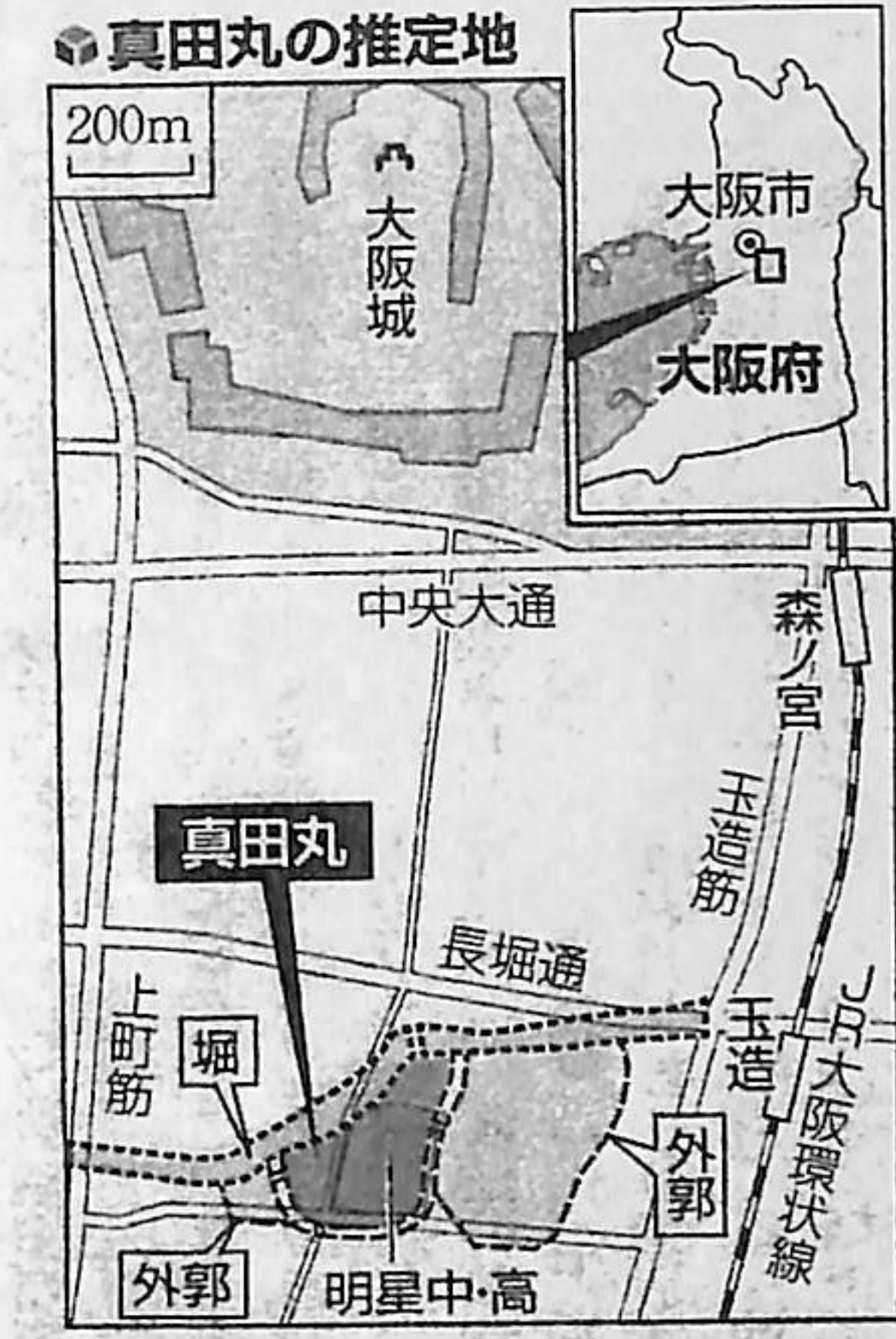
丸餅城び



「15周年記念の会」



読者新南 6月8日



真田丸新絵図から実像に迫る

NHK大河ドラマ「真田丸」の放送で注目を集めているのが、大坂冬の陣(1614年)で真田信繁(幸村)が設けた出城・真田丸。その姿や役割については不明な点が多いとされるが、大阪歴史博物館(大阪市)の研究者2人が新発見の史料から実像に迫った。大阪市の上町台地にあった豊臣期の大坂城は、谷の傾斜が途切れる南側が弱点とされ、そこに築かれたのが真田丸だ。古図などによると、南北約220m、東西約180mの規模で、空堀で囲まれた砦だとされる。同博物館の大澤研一・企画広報課長と松尾信裕・研究主筆(元禄十二年(1699年)の年号も付されていた)が、加賀・前田藩の文化遺産を伝える前田育徳会・尊経閣文庫(東京)が所蔵する資料を調査し、江戸時代の「大坂御陣真田丸之図」と「大坂冬の陣真田丸之図」を新たに確認。後者は「元禄十二年(1699年)の年号も付されていた」。

丸み帯びた形状 / 外郭設け敵撃退

同藩の2代目藩主・前田利常の軍勢は、徳川方による真田丸攻撃に参戦しており、大澤課長らは「二つの絵図を「当事者の記憶・認識が反映されたもので、成立の経過とおおよその制作年代がわかる初めての「真田丸図」と評価する。真田丸の形状は台形だったとする説もあるが、絵図を基に「本体は半円状またはU字状の丸みを帯びた形状」と判断。本体両翼に外郭を設け、敵を退ける機能があったと説明する。所在地に関しては、明治時代の史料などに「真田丸」と地名の記述がある同市天王寺区の明星中学・高校一帯だったとする従来の見方を支持している。一方、奈良大の千田嘉博学長(城郭考古学)は、著書「真田丸の謎 戦国時代を「城」で読み解く」(NHK出版新書)で、真田丸が大坂城と谷で隔てられた「独立した城」だったと指摘。敵をおびきよせて撃退する役目を担ったと主張する。この点、松尾研究主筆は「新発見の絵図には、大坂城との間に通路のような表現がある。行き来を確保し、一体で機能していたのでは」と反論している。大澤課長は「真田丸に苦しめられた前田家には、正確な記録・記憶が残っていたと考えられる。新発見の絵図は信用できる。発掘調査などでさらに解明が進むことを期待したい」と話す。大河ドラマにちなんだ特別展「真田丸」が19日まで、東京都・江戸東京博物館で開催中。同展は、7月2日〜8月21日、長野県・上田市立美術館、9月17日〜11月6日、大阪歴史博物館を巡回する。新発見の絵図2点は大阪展で公開される。(大阪本社編集委員 関口和哉)

文化 歴史